

第二章 大杉栄をめぐる人びと



エスペラント学校のメンバー（向かって右端千布利雄，三人目黒板勝美，四人目大杉栄）

エスペラントを学ぶということ、エスペラントの精神を学ぶということは、別だと思ふのです。もしも思想がこれまでと同様であれば、同じ品の商標だけ付けかえただけのことになります。

魯 迅

一犯一語主義——エスペラント学校を開く

大杉栄については、その全集が死後まもなく発行されている⁽¹⁾、新しい全集⁽²⁾も最近出て、個々の著作の相当部分も文庫などで再刊されており、かれについての研究書や論文にいたっては、最近のアナキズム復興(?)の波にのって、さかんに出てゐるから、新しい前進や発見も期待できよう。しかし、こと、大杉のエスペラント運動については、向井孝を除いて、最近の研究者たちの視野の外にあり、ときには、故意かと疑われるくらい無視されており、しだいに埋没されようとしている。せいぜい年表のたぐいに「一九〇六年、黒板勝美らと日本エスペラント協会創立」と書かれている程度である。しかも、この「創立」という事実は、いささか疑問でもあり、「創立に参加」と書いた方がよりふさわしく思われる⁽³⁾。

大杉がエスペラントのことを知ったのは、前掲の『直言』の記事によるものと推定されているが、学習をはじめたのは、一九〇六年三月十五日の東京電車運賃値上反対運動が暴動化して、その犠牲者として市ヶ谷刑務所にはいったときで、ガントレットのはじめた通信教育によってである。「元来僕は一犯一語という原則を立てていた。それは一犯ごとに一外国語をやるという意味だ。最初の未決監のときにはエスペラントをやった。次の巢鴨ではイタリー語をやった。二度目の巢鴨ではドイツ語をちよつとかじった。こんども未決の時からドイツ語の続きをやっている。で刑期も長い事だから、それ

エスペラント語講義

大杉 栄

以下等號する所の練習は、總て佛人 Th. Cart 氏の L'Esperanto en dix leçons (エスペラント語十章講義) に依りて。此書は英國言伊西白和等の諸言語に反譯せられて、甚だ其著たるの稱あるもの者也。有學社發行のセントレツト氏丸山氏合著の「世界語エスペラント」も實に此の書を反譯したる者也。而して予の講義は此の書の註釋とも見るを得べき者也。讀者は左段と右段とを能く參照して譯讀及び作文に熟す可し。但し日本文に成る可く原文に近からん事を勉めたるが故に、或は日本語として書ば可きしきふしもある。然れども是れたゞ讀者の原文を了解し易からんを期したるが爲め也。

練習 I

Gramatiko: { 1, 2, 3, 4, 7, 19, 20, 26.
 Prefikso: Mal, bo, ge.
 Sufikso: In.

文法 { 1, 2, 3, 4, 7, 19, 20, 26.
 接頭語: Mal, bo, ge.
 接尾語: In.

VORIFARADO.

Avino, gepatroj, bofilino, virino, edzino, malgrande, fianĉino, maljuna, malbona, filino, fratine, edza, sinjorino, geavoj, mabela, kokino, malvarma, katino, bofilo, bopatro, nepino, kuzino, bovino, servistino, fraŭlino, malgaja, onklino, fila, malkara.

EKZRECO.

A.—La onklino legas kaj la nevinoj kuras kun la junaj knaboj en la vilaĝo.—Edzo kaj edzino estas geedzoj.—Ĉu la filino de la najbaro estas granda?—Jes, sinjoro, sed la filino de la servisto estas malgranda kaj mabela.—Ĉu la felikoj gefianĉinoj estas ankoraŭ en la ĝardeno de la maljuna kuzo?—Ne, sinjorino, la fraŭlino estas sola, la fianĉo estas ĉe la najbaro.

造語法

祖母、兩親、嫁、女、妻、小さく、許嫁の女、若いたる、悪しき、娘、姉妹の如く、夫の、夫人、祖父、母、醜き、牝鷄、寒き、牝鷄、婿、男、孫娘、従姉妹、牝牛、下女、令嬢、悲しき、伯(叔)母、子としての、安價の。

譯讀

A.—伯母は本を讀んでゐる、そして姪共は若い男の兒等と村落に遊んでゐる。一夫と妻とは夫婦である。一隣の人の娘は大きくあるか。一そうです然し下男の子は小さくて醜い。一あの幸福な許婚の男女は未だ年老つた従兄弟の庭にゐますか。一イ、エ、奥さん、令嬢は一人でゐます、そして許婚の方は隣の人の家にゐます。

四十三

大杉栄が『語学』に連載したエスペラントの講義

がいい加減ものになったら、次にはロシア語をやってみよう。そして出るまでにはスペイン語をちょっとかじってみたい、とまぎされた。今までの経験によると、ほぼ三か月目に初歩を終えて、六か月目には字引なしに、いい加減本が読める」と豪語し、六か国語でドモるといふかれのことである、たちまちエスペラントをある程度モノにしてしまつて、保釈後まもなくその母校である東京外国語学校の研究誌『語学』にエスペラントの講義を連載しはじめ、九月十七日には東京本郷の私立習性小学校を借り受け、「エスペラント学校」と銘うって講習会をはじめた。この生徒の中から、後日の日本エスペラント運動の大立物、偉大なる俗物であつた千布利雄が出たのは、歴史の皮肉と言ふべきであろう。この学校は翌年四月の大杉の入獄で廃止になるのだが、第一回の卒業式には協会の主宰者黒板勝美はもちろん、前外務大臣加藤高明までかり出して祝辞を述べさせたのは、相当な腕前である。この年六月に創立されたばかりの日本エスペラント協会の主催にはなつてゐるものの、事實は大杉の個人的な仕事であつたのだから。

同年九月二十八日、東京で開かれた協会の第一回大会(のちに第一回日本エスペラント大会と呼ばれるようになる)のとき、準備会の席上、だれかが「何か余興みたいなのものが欲しいね」と言つと、「よし、オレがやる」と大杉が言下に引受け、一夜のうちに「桃太郎」を巖谷小波の昔話から訳してきて、一三〇名の大会参加者の前に朗々と(か、どうかはわからぬ。なにしろドモリの大杉である)読みあげたのである。この「桃太郎」は旧版の全集第四巻に、石黒修と山鹿泰治の努力で集められたエスペラント欄(これはずいぶん不十分なもので、他にも大杉のエスペラント関係で収録もれがある)に収められており、短期の学習にしては相当のときばえと言へる。(この全集所収のエスペラントの原文に、山鹿や石黒の手がはい

っていないことは、いろいろな事情で断定できる。しかし、日本の昔話の中から、よりによって、もっとも帝国主義的な「桃太郎」という作品を選んだことは、たとえ一時の余興にしても、やはり大杉自身、あるいはアナキズム自身の思想的モロさを示している、とも言えそうである。

「主義者」の時代

こちらで一九〇六年ははじめからの社会情勢を例によって年表にしてみると――

一月七日 西園寺内閣成立。

二月二十四日 樋口伝・西川光二郎らの日本平民党と、堺利彦・深尾韶らの日本社会党が合同して、単一政党として日本社会党を結成、第一回大会開催。

三月十一日 東京市電値上反対市民大会を日本社会党と田川大吉郎らの自由主義者の共催で開き、

乗車ポイコトを決議。十五日には一六〇〇名の反対デモ、軍隊・騎馬警官の出動、大杉栄・荒畑寒村・吉川守園ら一五名検挙。

三月十五日 堺利彦『社会主義研究』を学術雑誌として創刊、第一号に改訳『共産党宣言』を掲載。

三月十八日 島崎藤村『破戒』を出版。

五月九日 北一輝『国体論及び純正社会主義』を自費出版。六月発禁。

六月十二日 日本エスペラント協会創立。

六月二十八日 神田錦輝館の日本社会党演説会で、幸徳秋水が直接行動論をとなえる。

八月十八日 吳砲兵工廠のストライキ暴動化。

十二月十五日 南助松・永岡鶴蔵ら夕張・足尾に大日本労働至誠会を組織。

この月、山川均、倉敷より上京、平民新聞に入社。

一言にして言えば、幸徳中心の激派、堺中心の激派寄りの中間派、片山潜系統の軟派が、それぞれ、旗色を鮮明にしていない人たちと共に、「主義者」の名で一括して呼ばれる一団の反体制的小グループを作っていた時代である。

在日中国人にエスペラントを教える

その他、大杉のエスペラントの仕事としては、『国際社会評論』(Internacia Socia Revuo)に寄稿したり、その主宰したいろいろな雑誌新聞(『平民新聞』『近代思想』『労働運動』など)にエスペラント欄を作ったり、エスペラントのサブタイトルをつけたりしており、さらに、いささか子どもじみたエスペラント界の企画にのって「エスペラント日本副領事」になったりしているが、かれのもっとも重要な仕事としては、在日中国人にエスペラントを教えたことであろう。判明しているだけで言えば、一九〇八年四月に約二〇名を相手に講習会を開いた。このときの受講生、あるいはこれに前後して教わった人の中には、景梅九・劉申叔・張溥泉・劉師培らのアナキストが⁽⁸⁾いる。張継もそのひとりと推定さ

れる。かれらが日本で出した雑誌のいくつかは、それぞれエスペ란ティストの紹介につとめて、『衡報』(Escale)のようにエス文のサブタイトルをつけた雑誌が多かったと言う。もっともパリの留学生グループ、呉稚暉・褚民誼・李石曾らの雑誌『新世紀』(Ta Tenpoi Nova)なども同様であるが⁽⁹⁾。在日中国人が日本で開いた第一回社会主義講演会(一九〇七)には、幸徳秋水が講演して「エスペラントでやれたらよいのだが」と前おきしてはじめた、ということは何かで読んだが失念して、今出典を明らかにできないのは残念である。いずれにしても、中国へエスペラントを持ちこんだ源流のひとつが、大杉栄のそれであったことは確実である。後述の中国唯一の純正アナキストとも言える劉師復(劉思復、また姓を廃して師復とも言う)と大杉との東京時代の交流が証明されていないのが残念であるが。

坂本清馬・岡林寅松らの幸徳事件の犠牲者がエスペラントを習ったのは、本格的には獄中のことであるが、坂本が宮本にあてた私信によると、大杉の中国人への講習会を傍聴(?)したことがある、と言う。これは坂本にかぎらず、多くの社会主義者が大なり小なりやったことであろう。

福田国太郎のこと

大杉の影響を受けた数多いエスペランティストの中で、もっともエスペラントが達者であったのは、福田国太郎である。福田は、一八八六年、鳥取県に生まれて、一九〇三年から学習、協会創立と共に入会した。伊東三郎によると、小坂狷二・千布利雄と併称される大家であったと言う。一九二〇年に

は、大阪盲学校を開いたエスペランティストの岩橋武夫の助けをかりて、相坂佑・平野長克(夕顔と号し、賤が岳七本槍の平野権平の子孫で、当時は男爵であった)・森内英太郎と共に、大阪市南区上本町七丁目二二五六番地の岩橋宅を発行所にして、全文エスペラントの文化雑誌 Verda Utopio (『緑のネーピア』)を一九二〇年七月から出しはじめ、一二号まで発行し、千布利雄編『エスペラント読本及文範』を出版したりした。「先生は口の重い温厚な態度の人である。先生は自分の部屋ではエスペラントの最も古い書物類(ザメンホフの『第一書』をはじめとして)をうす高く積んで、その中に埋まっている……先生が若かったころ、いかにこれらの国際的通信に熱心であったかは、当時の下宿の女将が『福田さんは便所に一度も降りて来ない、生きているのかしら』とさんさん気をもんだ逸事にもうかがわれる……: 欧州戦後、ヨーロッパの同志によってあげられたプロレタリア・エスペラント運動の国際的再組織のノロシ『中立主義をすてよ』の宣言に呼応して、断然日本エスペラント学会を見すて……: 黙々としてプロレタリア・エスペラント運動の方向へ歩いた」と伊東三郎が書いているとおり、福田は、牧師であった百島操の援助で、大阪東教会を根城にして、労働者や社会主義者の間にエスペラントを持ちこんだ。百島自身もこれに加わり、トルストイアンから社会主義者に転向、教会を追われて夜店商人になり、のちには日本橋六丁目で同人協会という小さい本屋をはじめ、社会主義やエスペラントの本の専門屋になった。百島は、戦後は大阪の股が池で本屋をしながら『アカハタ』の配布を手伝っていたが、一九六五年、八十八歳で病死した。幸徳事件の犠牲者武田九平の弟である伝次郎、いま婦人民主クラブの中央委員である松本員枝らも、福田からエスペラントを習った。のちの共産党指導者三田村四郎・田井為七・高橋貞樹、水平社を創立した西光万吉・阪本清一郎・駒井喜作

ら、関西の社会主義運動の先駆者たち⁽¹³⁾が、エスペラントを大なり小なりかじったのも、この福田の努力の影響である。

しかし、福田自身は実践的アナキストではなかった。当今はやりの「心情的」と自らを限定していたように思える。おそらく「社会主義運動は他のやつでもやれるが、エスペラント運動はオレでなくては」という自負心も手伝っていたのであろう。「ヴェルダ・ウト・ピオ」の紙面の大部分を占めている文章は、「エロシエンユ君におくる」という福田の抗議文を除けば、大部分、社会主義と相当離れたものであることも、そのことを実証している。言いかえれば、かれは性急なアナキストではなく、平野などを同人にするように、より広範な運動を指向していた人であった。かれらがロシア飢饉救済運動に参加したことも、直ちに社会主義の実践活動とは断しがたい。この運動には、与謝野晶子・三浦環・菊池寛らの自由主義者も積極的に参加しているくらいであるから。まして、この運動の本当の組織者が、生まれてまもない日本共産党であることは知らなかったにちがいない。

福田は大阪梅田新道の角にある共同火災保険の課長として神妙に働いていたらしい。(民社党委員長であった故西村栄一もだいたいぶおられて、この会社の役員になっていた)父直造の代からの古いアナキスト逸見吉三が宮本に語ったところによると、逸見はよく大杉の手紙を持って福田のところへ金をもらいに行ったり、翻訳をたのみに行ったそうである。ここから、大杉名儀のエスペラント文、とくに『平民新聞』関係のものの中に、福田の筆になるものが相当あるはずだ、という宮本の推定が出てくる。藤間常太郎の書いたもの⁽¹⁵⁾によると、福田は晩年東洋的な虚無思想に傾いていた、と言うが、それでも福田が「アナキズムを捨てた」と言いきることもできない。アナキスト自体が、老子や莊子をアナキズ

ムの先駆者と考えているのだから、藤間の判断(しかも戦中の)をそのまま肯定はできない。

福田は一九四〇年三月三日、五十三歳で死んだ。「紀元二千六百年」という帝國主義侵略賛美のカーンピアに、日本のエスペラントストもおどって、その大会を「肇國の地」宮崎で開こうとしていたときであった。そして、ザメンホフの手紙をふくむ多くの書類が、戦中戦後に家族の手によってタキツケ代わりに燃やされてしまったらしい。その大部の蔵書のうちの一部分が、戦後の古本屋に出たことがある。これを見つけた、同じ浜寺に住む某氏が遺族の手から残り全部を買いとり、その一部の社会主義関係の文献だけが、当時あった大阪労働者エスペラント会の手に残された。古本屋に流出した文献のうち、いま世界に数少ない『国際社会評論』のそろいは、現在、大阪の某教授の秘蔵するところとなっている。

相坂侘のこと

旧版『大杉栄全集』第四巻にしばしば名の出てくるエスペラントストのひとりに相坂侘がある。相坂は、同じエスペラントストの山鹿泰治と共に、発売禁止の『平民新聞』を木賃宿や寺院の縁の下をネグラにして労働者に配布したと言う。かれは古い時代からの社会主義者で、日刊『平民新聞』に短歌を発表したりしている。「君が代は千代に八千代と歌う子の眼くぼみ ほお落ち おおかみのこと」「いづくにか革命の子らたちたりし 夕べゆく雲さまざまならぬ⁽¹⁶⁾」などという歌がある。その相坂がエ

スベラントを学んだのは、一九〇七年のことだそうだが、『社会主義者沿革 下巻』（日本近代史研究会復刻）によると、「（明治）四十三年七月末原籍地広島県より出京滞在中の相坂佑（四十三年十月十九日主義者に編入——これはブラックリストにのせられたということ。筆者）においても、陰謀事件に関し同年十月十三日原籍地所在の自宅を捜索され、ついで本人は同月十五日東京地方裁判所検事局に出頭取調を受ける処ありしが、同月二十八日、田中泰と同様不敬罪の被告人として拘留状を執行せられたり。右兩名に係る不敬事件の内容は、陰謀事件関係者三浦安太郎が明治四十二年五月中、田中泰へあて『入獄記念無政府共産』と題する出版物を郵送せしを、田中はこれを流布するの目的を以て、同月中相坂佑へ転送し、相坂はさらに同一の目的をもって同年九月中、大久保繁助に郵送したるものにして、兩名とも同四十三年十二月十一日東京地方裁判所において懲役五年に処せられ、田中は控訴し、相坂は控訴に次ぎ上告を申立てたるも、いずれも棄却となり、千葉監獄において服役中」となっている。つまり、幸徳事件のトバッチリを食らったわけである。相坂は一九二二年九月二十七日大赦により出獄、その後、堺利彦と協力して、その主宰する雑誌『へちまの花』の発行名義人になったり、大杉派として、宮島資夫・同麗子・百瀬晋・荒川義英・有吉三吉・山鹿泰治らと、東京小石川区水道端町二丁目十六番地の宮島家に「エスベラント語研究会」の看板をあげて、研究会の企てを立てたりしたが、長つづきしなかつたらしい。もっとも長つづきしなくてよかつたのかも知れぬ。というのは、会員の有吉三吉が当局のスパイであったのだから。これにみられるとおり、相坂は激派と中間派の間を動いていっただけだ。相坂が大阪に来たのは、一九一六年十月十日である。（当局の詳細な記録のおかげで、こんなつまらぬことまでわかるのである）社会主義共同戦線の文化雑誌として、小牧近江らによって一九二二年

に創刊された『種蒔く人』に毎号出ていた「種蒔き社宣言」（日本語の文は削除されていたが、エスベラント文は無傷のままであった）のエスベラント訳はこの人の手になるものである。⁽¹⁸⁾この年の三月十二日、相坂は阪上佐兵衛ら、のちには『朝日新聞』にいた高尾亮雄⁽¹⁹⁾らと協力して大阪エスベラント協会を作っている。

宮本が相坂に会ったのは、宮本が、一九三七年の人民戦線運動検挙で打撃を受けた大阪サラリーマン協会の再建にあたっていたころのことである。この協会は大阪阿倍野区のさるアパートに本部があつて、西村栄一を委員長にかついでいたのだが、この事件で書記の上杉定義が検挙されてからは、西村は事務所へ全然現われなかつた。相坂はこの協会の執行委員かなにかをやつており、その付近のアパートに住んでいた。宮本がたずねたときは、ちょうど夫婦ゲンカの最中とかで、奥さんは自分の部屋の入口に畳をたててバリケードを築き顔も見せなかつた。ふたりの間の子、マルテロ（エスベラントで「ハンマー」のこと）君も見かけなかつた。「いま何を勉強していますか？」と、獄中でエスベラントを習ってきた宮本が、生まれてはじめてのエスベラントで話しかけると、「ヒギエーノ」という答えがかえってきた。「衛生」とか「衛生学」とか訳すべきコトバで、「おん身ご大切にすアナキストとはケッタイな……」と思つたが、今文献にあつてみると、相坂は当時『優生新聞』（サブタイトルに La Revue Eugénika とエスベラントがはいつていた）の編集に従事していたのであつた。

『解放のいしすえ（新版）』によると、相坂は一九四〇年十二月十四日、六十歳で病死しており、その遺族として広島⁽¹⁹⁾の武田正視という人があげられている。アナキストの間でも相坂の大阪以後の行動はあまりくわしく知られていないようである。あるいは大阪へ来ることによって、古い仲間と絶縁

したのもあろうか。それにしても、マルテロ君のその後を知りたいものである。

アナキストたち——山鹿泰治らのこと

エスペラントとアナキズムとの関係について語るべきことはまだまだ多い。大ざっぱに言えば、当時のアナキストの大部分が、それ相応にエスペラントをかじっていた。幸徳事件で死刑になった古河力作の実弟、三樹松（三樹とも称した）・島津末二郎・平松義輝・山鹿泰治らは、小池英三（村上信彦の小説『音高く流れぬ』のモデルであり、『クロボトキン全集』の完成者）と共同して雑誌 La Anarkisto（『アナキスト』）を一九二九年に出し、一二号までつづけた。この方は福田らの雑誌とはちがって、旗色鮮明、アナキズムを真向からふりかざしたものである。「貧時交」の詩人菊岡久利、のちに無政府共産党の委員長に上がったこれも詩人の植村謙、その他大勢がエスペラントを学んだ。ギロチン団事件として一世をさわがせた摂政官（いまの天皇）暗殺計画の首謀者になった中浜鉄（富岡誓）も、これも逸見吉三の宮本への談話によると、最後の獄中でエスペラントの詩を書いたと言う。（この原稿は行く不明）

「杉よ、眼の男よ」と中浜が歌った大杉に魅せられたのは、堀保子・神近市子・伊藤野枝その他の女性ばかりではない。多くの荒らくれ男たちも、大杉の戦闘的姿勢の魅力のとりことなり、関東大震災の下サクサに大杉が甘粕正彦らの憲兵によって殺害されるや（この犯人についても疑問があるそうだ）、

きわめて古典的に大杉のカタキ討ちを企てる人たちも現われる次第だった。しかもアナキズム運動そのものが、大杉の死後、急速に衰えたのであるから、かれの魅力は相当なものであった。かれらの同志の中に、直接間接、かれの影響で、エスペラントとアナキズムの思想的接近性をみとめてエスペラントを習った人たちが、ずいぶん多いのも当然のことであろう。しかし、その大部分は、その思想の実践に役だたせるまでエスペラントに熟達する以前に、いい加減なところで学習をやめてしまった。思うに、エスペラントも、やはり当時の大部分のアジア人にとってはむずかしいものであり、また目前のパンに追われる人びとに訴えかける力において乏しいものがあるからであろう。

しかし、その大杉の理想を実現するために、アナキズムとエスペラントに一身をささげた人がいた。次に登場する山鹿泰治がそれである。⁽²⁰⁾

「葬式は無用である、遺体は解剖用に寄付せよ、墓のたぐいはナンセンス」と、まことにアナキストらしい遺言を残して、一九七〇年に死んだ山鹿泰治の七十八歳の生涯は、まさに「男の中の男一匹」という古めかしい形容に価するものであった。

一八九二年、京都に生まれ、中学中退で上京し、就職した先は、中村弥二郎の経営する有楽町三丁目一番地の有楽社であった。中村は有楽と号し、『東京パック』や『グラフィック』など異色ある雑誌や、英語研究誌を出す一方では、堺利彦・山川均・大杉栄らに訳させた『平民科学叢書』を出版していた。また、天皇の写真に敬礼を拒否して一高を追われた内村鑑三の生活のめんどろを一時期みた反骨の人である。もっとも内村への援助は、しばらくして打ち切った。人には禁酒をすすめる内村が、自分の体質では適当なアルコールが必要だ、というような私生活をしていたのに愛想をつかしたので

ある。(21) (内村のこの中途ハンパな姿勢については後にふれる) 日本エスベラント協会の事務所は、中村の好意で、有楽社の中におかれていた。

もちろん、有楽社の社内でも講習会を開き、店員たちにも受講をすすめた。一九〇七年三月に開かれたこの会の講習生のひとり、わが山鹿であった。その先生は黒板勝美である。黒板は、聖徳太子奉賛会や皇室ナントカ会の幹部におさまり、自分が主宰する雑誌『La Japona Esperantisto』(『日本エスベラント』)に、教育勅語を翻訳して掲載し、一方、幸徳や堺の友人であり、「第一次」共産党事件で証拠品になった、高瀬清の書いた議事録の鑑定を引受けて、それを否定する偽証をやつてのけ、検挙された左翼学生のもらい下げに警視庁に出かけていって「勅任官ナン等のオレの弟子を勝手につかまえるとは何事だ！」と警官をとちめる、というようなエピソードを持つ、いわば大親分であった。(22)

救世軍の活動に熱心であった山鹿が、有楽社をやめて印刷工になったとき、同僚の影響でアナキズムに近づき、「会って話を聞きたい」とエスベラント文の手紙を大杉栄に出したのがいわば運の尽きで、たちまちアナキストに「変身」して、その一生を反体制の道に生きる事になった。

山鹿は、何はともあれ、外国へ出かけて、その地の運動をこの目でたしかめてやる、そのためには印刷以外にもうひとつぐらい仕事をおぼえておこう、と思いついて、京都へ帰り、奥村電機にはいつて見習工として働き、かたわら講義録で猛勉強した。「猛勉強表の尾行大あくび」とは、山鹿とその同志延島英一をうたった信濃太郎の川柳である。山鹿は電気工として一人前になると、大連発電所へ就職した。ここで大杉の手紙を受け取ったのが一九一四年の春。「中国の同志師復が上海でエス中

両語併用の雑誌『民声』を出している。応援に行つてやらないか！」よしきた。山鹿はただちに辞表を書いて、トランク一つで一路上海へ走った。

師復は本名を劉思復と言ひ、民族主義者であった時代に清朝の高官を暗殺しようとして爆弾を製造中、失敗して片手を失ひ義手をはめていた。そしてアナキストに転向した。短い生涯というせいもあるたのであろうが、李石曾・張継ら、ほとんど全部の当時の中国のアナキストがのちに国民党右翼に転身する中で、ただひとり純粹アナキストとして一生を終わった人である。肺結核で重体に陥り、療

民声

第二十三號

東京民権社出版

本報編輯主任師復君於千九百十五年三月二十七日以病逝世
本報謹誌

師復君行状

劉思復

君は十八百十四年六月廿七日生於支那廣東香山縣。性清謹、剛毅、十五歲時在而後、漸不為克己守節、



La portr. de Liu Sifan 師復君遺像

經百氏、有所聞、雖不識、治小學、勤奮、所記、數載、爲師、尊如天、七八歲、始識、其、後、學、師、水、爲、師、有、餘、理、解、千、九、百、一、年、有、別、志、改、原、無、狀、師、原、血、

成、沒、家、業、留、學、日、本、進、年、百、零、九、編、輯、報、章、其、後、復、其、志、力、成、立、機、即、上、香、港、主、是、報、章、政、議、談、進、主、義、以、開、旋、吾、伯、爾、女、學、時、亦、報、章、主、是、報、章、政、議、談、進、主、義、以、開、學、不、以、成、立、千、九、百、七、年、入、黨、有、事、於、法、庭、提、行、年、進、故

『民声』(1915年5月5日号表紙、下の写真は師復)

養費に窮したとき、その所有する印刷機を売ってはそのすすめを、「これはアナキスト共同の財産だ」と断固拒絶して、ついに死んでいったと言う。人間に姓はいらぬと宮武外骨と同じような主張をして、中国の王様と同じ姓をやめてしまつて、単に師復(エスベラント名は Sifu)を名のつた。わが山鹿の思想にいちばん大きい影響を与えた人は、おそらく大杉とこの師復であろう。前者は何物をも燃え

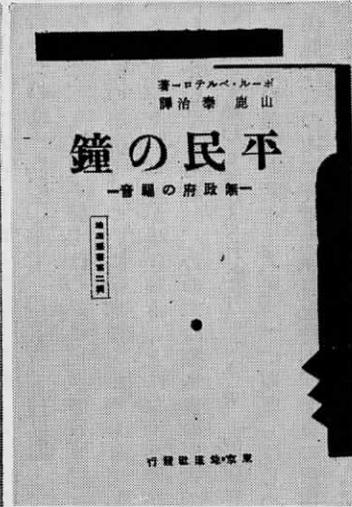
つくさずにはおかぬ不屈の闘争心を、後者は東洋的聖人も遠く及ばぬ殉教(?)精神を、山鹿に植えつけた。そして、それらが、かつて救世軍に熱中したような本来の正義心と相まって、山鹿の人格を作りあげたのであった。

師復の雑誌は、はじめ *La Voce de la Popolo* (『人民の声』) というエスペラントだけの誌名であったそうだが、筆者が見ることを得た日本エスペラント学会の所蔵本は、その創刊号を欠いていて、それをたしかめることはできない。第二号は『晦鳴録』(一名『平民の声』)となっていて、一六ページのうち四ページがエスペラント欄にあてられ、前掲の題号をつけている。「晦鳴」とは「鶏鳴」と同じく、暗黒の中で鳴くニワトリの声であり、師復の結社の名でもあった。「倡道社会革命促進世界大同」のスローガンを掲げた、毎号一二一六ページの小冊子である。

師復はこの雑誌を一九一三年に創刊し、李石曾らが一九〇七年にパリではじめた『新世紀』に呼応して、この国にアナキズムの宣伝をねばり強く行ない、クロボトキン・バクーニン・トルストイらの思想をひろめた。そして広東を追われ、マカオに入り、ここからも追われて、ついに上海の共同租界に、八ページ刷りの手動印刷機を備えた秘密出版所を作って、妹の無為、のちにこの無為の夫になった鄭佩剛(この人も「廢姓」した)その他十数人の同志と共に仕事をしていった。執筆、印刷、発送、それに資金面の苦労までが片腕のない師復を中心に行なわれていた。

山鹿はここで半年間、組版や印刷、発送などの仕事を手伝った。雑誌に執筆したかどうか、残念ながら、残された資料からはその貢献を立証できない。一九一四年八月、『平民新聞』を再刊することになった大杉に呼びもとされるまでの間のことである。

一九一九年には、山鹿は京都での秘密出版がばれて禁固三年の刑を受けた。未決とあわせて三年余りの間、堀川監獄に入っていた。この秘密出版物の中には、フランスのアナキスト、ポール・ベルテローが書いた *La Evangelio de la Horo* (『時の福音』) というのがあった。オランダで出していた前述の『国際社会評論』の仲間が出した小さいパンフレットの複製であるが、このため、山鹿は日本エスペラント運動最初の受刑者になる。刑務所でエスペラントを習った者は多いが、エスペラントのために刑務所入りしたのは、山鹿をもって第一号とする。この「福音」の作者ベルテローは、アナキスト仲間でもあまり知られてはいない。山鹿自身も、宮本の質問にあまりくわしくは答えられなかった。アナキズム運動それ自体では、あまり活動しなかった人で、いわば福田国太郎のような人であつたらしい。一八八二年にフランスで生まれ、一九一〇年にブラジルで死んだ人である。エスペラントを習ったのは一九〇〇年で、『国際社会評論』の中心人物であり、エスペラントの著書も若干ある。この本は、フランス語ではついに出版されずにエスペラント版だけが普及したものと思われる。⁽²⁵⁾ それとも何かの事情で、ついに原本の方が埋もれてしまったのであろうか。あるいは師復や山鹿の熱情でエスペラント版だけが生き残ることになったのか。アナキスト諸君に聞き合せても、確たる返答が得られない。ともあれ、この本は福音書の形式で書かれたアナキズムの入門書、あるいは哲学書で、『老子』を思わせるすぐれた作品である。師復はこれを中国語に訳して、そのキリスト教くさい題名を『平民の鐘』と変えて『民声』に連載しはじめ、その死後、方統という人がこの仕事をつづけた。山鹿はこの本に非常な執着を持ち、師復の訳書と同じ題名で、戦前から戦後にかけて、あるいはエスペラント文だけ、あるいは日本語訳、あるいは対訳で、非合法出版までふくめると、数種以上出版し

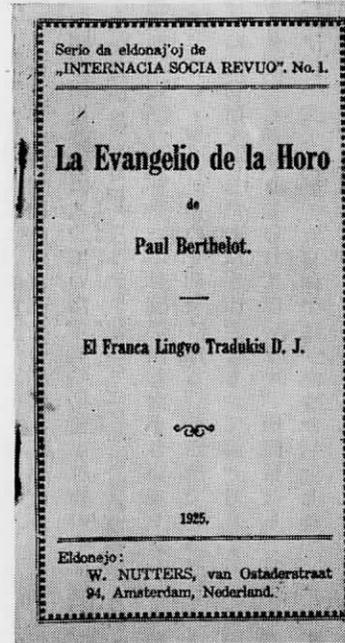


山鹿が秘密出版した『時の福音』の原本（左）、訳本（右）。

たもようである。最後に出版されたのは、かつて地底社から一九三〇年に伏字入りで出されたものを、大島英三郎の黒色戦線社が「一九七〇年八月、著者死去の日」という奥付入りで出した復刻版である。

一九二二年に、山鹿は吉田一のすすめで徳田球一と会い、ソ同盟へ行くことになり、まず吉田とふたりで上海まで行く。ところが、待てどくらせど、

徳球が現われないので、進退に窮するハメに陥る。この始末は、立野信之の小説『黒い花』にもくわしい。山鹿の共産党ぎらいがこれでいっそう昂じるわけだが、徳田球一には徳田球一の理屈がある。当時の日本共産党、あるいはコミンテルンは、大杉栄を皮きりに、吉田一・水沼熊らを利用するつも



りで反対にすいぶん利用されているのだから。徳田球一が途中でいや気がさしたのか、それとも、だれかに中止を勧告されたものであるう。とにかく、山鹿の入ソは果たされず、北一輝と密接な関係を持つていた医師長田実や、のちに大本教の幹部のひとりになる「赤化将校」飯森正芳海軍少佐の助力で、ほうほうの体で帰国した。(北一輝と山鹿の関係については後述)

山鹿はその年の冬にはまたもや中国へ渡った。世界アナキスト大会の招請を受けた大杉栄のためにニセ旅券を入手しに、北京へ密航したのである。ここには、旧知のエロシエンコが、中国エスペラント運動の先駆者である魯迅の弟であり、自身エスペランチストでもある周作人の庇護を受けながら、北京大学でロシア文学を教えていた。(26) エロシエンコは一九二一年に日本から追放された盲目の詩人である。まず、かれをたずねて、さらに景梅九・王魯彦・陳崑山(空山か?)その他のアナキスト、エスペランチストの手をかりて、ニセ旅券を入手しようとしたが、うまくはこばない。あるいは、これらのアナキストたちがすでに転向をはじめていて、後難をおそれてサボったこともあり得る。高杉一郎は、山鹿自身の談話にもとづき、その著書『盲目の詩人エロシエンコ』で「旅券を入手した」と書いているが、これは近藤憲二の言う方が正しい。時の勢いで、つい成功したように山鹿が言ったのか、高杉が早合点をしたのか、どちらかであろう。宮本自身、高杉の本が出てから、山鹿にこのことをたしかめてもいる。入手できずにマゴマゴしているうちに大杉自身が出かけてきて、ニセ旅券を入手したのであった。

一九二七年五月二十日から二十六日まで、国民党左派が支配していた武漢政府下の漢口で、汎太平洋労働組合大会が開かれた。プロフインターン(国際赤色労働組合)の提唱によるものであるが、この

招請は太平洋沿岸諸国のあらゆる傾向の労働組合に送られてきた。日本でも左派の評議会はもちろんのこと、総同盟・海員組合などの右翼組合にもこの招請が来たのであるが、右翼組合は当然「またもヤアカの策動」として、幹部の手で握りつぶしてしまつたのである。しかし、山鹿はこれにとびついた。この会議がコミンテルンの勢力拡大の一方法として行なわれることを、山鹿が知らなかったはずはないが、どこまでも理想を追求する山鹿は、総同盟の西尾末広などとちがって、万国の労働者が団結するのは当然のことだし、アナキストの勢力拡張のために利用できないものでもなからう、というような考えから支持したのであらう。関東労働組合自由連合大会に、東京印刷工組合の名で提案して、代表派遣を可決させ、さらに全国自連の追認を得た。そして、歌川伸・水沼熊・松本親敏・大塚貞三郎が代表として選ばれる。最初の予定の五月一日には、一行が開催地の広東に到着したが、会合は国民党右翼の弾圧のため延期され、会場を漢口に変えて五月二十日から二十七日まで開かれた。一方、共産党系では、レフト（プロフィンテルン加盟者で組織された労働組合内の左翼結集体）の手配で、日本労働組合評議会や統一同盟から、山本懸蔵・日下部千代一・白土五郎・西村蔡喜・簀本正義が派遣されて来る。ソ同盟からはロゾフスキーほか四名、中国は蘇兆徴・李立燦（李立三か、しばらく近藤憲二による）ら一八名、アメリカからは後の共産党委員長ブラウダーら二名、それにフランス・イギリス・ジャワ（インドネシア）・朝鮮・インドなどから代表者が来た。ロゾフスキーを議長として開かれた会議は、もちろんすべて共産党ベースで進行し、山鹿の希望の見とおしなどは問題にもならず、アナキスト側の発言はほとんど無視される始末だった。

これにはさらに後日談がある。共産党の実力を見せつけられたアナキスト系労働組合の内部の動揺

が深刻化し、歌川伸・山本忠平（詩人陀田勸助）・神山茂夫らが急速にボル化し、やがてかれらが共産党へはいるきつかけのひとつになってしまったのである。この山鹿の見とおしの甘さは、大杉栄が近藤栄蔵をコミンテルンに派遣して、援助金を持ちにげされ、「ゴマノハイ」と毒づいた事件の再版とも言えよう。もっとも後者の場合は、コミンテルンを金の面だけで利用しようとした大杉の方が「ゴマノハイ」的であるが。

つづいて一九二七年八月、「ヤマガ インカワリヨウシラシヨウヘイス」という、上海江湾鎮にあった国立労働大学からの電報で、またもや中国へ出かけることになる。この労働大学というのは、共産党の台頭をおそれた国民党右翼がアナキストを利用して（利用されて？）作つたもので、エスペラント



山鹿泰治

を正科にしていた。ここで山鹿は「世界語教師薪水（月給 一〇〇元）の辞令をもらって、中国各地から来た青年労働者七〇〇名にエスペラントを教える。おそらく、かれの一生でもっとも得意な場面であつたらう。石川三四郎や岩佐作太郎も来た。そのうちに、エスペランティストの社会学者陳声樹や、九州大学医学部出身の祝振綱がやって来て、山鹿は一学期かぎりでもエスペラントの教師をやめることになる。

この労働大学は中日戦争で完全に破壊されてし

まうのであるが、どうやら、中国のアナキズム運動史で重要な転回期、いや没落期を象徴したものに思ふ。反共に固執していて、かんじんの敵そのものを見失ってしまったのはマイナスになるだけである。

山鹿は戦争中フィリピンへ行き、そこで徴用されて印刷所などを作りあげたりしたが、敗戦前に帰国した。召集されてこの地へ派遣されて来て山鹿と劇的対面をした子の大次郎——ギロチン団事件と呼ばれる現天皇へのテロを企画した事件で死刑になった古田大次郎をしのんでつけた名である——は混戦の中で戦死した。

戦後は京都岡崎御所町に家をかまへ、ふたたびエスペラントを使ってアナキズム運動の国際関係で働いた。たしかアメリカの同志からのカンパで買ったと聞いたが、手刷り印刷機をおき、タイプライター用活字を使って——これはふつうの欧文活字が字体に応じてそれぞれ幅がちがうのでシロウトにやりにくいからと、山鹿が説明していた——桑原幸雄・前田幸長・向井孝らの青年たちを督励して、組版、印刷から製本までをみんなの手で仕上げるのであったが、小さい、しかし多くのアナキズム関係のエスペラントのパンフレットや『平民新聞』のエス文要約などを作っていた。師復の志をついだわけである。

六十八歳になって、今度はインド旅行をした。一九六〇年十二月二十一日から一週間、マドラス州ガンジグラムで戦争抵抗者インタナショナルの第一〇回世界大会を開くから、日本からも代表を送られ、という呼びかけが送られてきたからであった。

この戦争抵抗者インタナショナルはヨーロッパでクエーカー教徒が中心になって組織していたものであるが、当時の日本ではアナキスト連盟が団体加盟、あるいは個人加盟でか、とにかく全員参加していた。エスペラントを公用語のひとつとしている今では数少ない団体である。

老体をおしての出席というので、カンパの要請を受けた筆者たちは、山鹿は生きて帰らぬ決心であろうと思ったのであるが、案にたがわず、後日判明したところによると、詳細をきわめた旅行計画の中には、帰途についてのプランが全然立てられていなかったと言う。ともあれ、山鹿はこの大会に無事出席し、その第二日にはエスペラントで演説して満場の拍手を受けたそうである。当初の計画では、この大会のあと、ガンジーが残した非暴力運動の実際を見ることが、とくにビノーバ老人（これもエスペラント）たちの土地解放運動の視察、セイロンをふくむ各地のエスペラントとの交流、そして、さらに中国の奥地に昔のアナキスト仲間をたずねるつもりであったらしい。もっとも、この最後の計画は、いかにも人民中国の事情に暗いアナキストらしく、当時の外文出版社（いまはナントカ総署と名前が変わっている）の社長をしている胡命之に手引をたのむつもりであった。胡は山鹿にとっても旧知のエスペラントであり、エロシエンコの作品集を出した古い自由主義的ジャーナリストであったが、今では思想的にすっかり変わっていて、いくら旧友だからといっても、「反革命的傾向」を持つアナキストの活動を助けるはずがない。ここらあたりにも、山鹿の、いや、アナキストの、エスペラントの「お人よし」が顔を見せている。ともあれ、山鹿は「期待に反して」生きて帰って来た。

山鹿のエスペラント活動について書くべきことは、まだまだ多く、また筆者たちの知らないことも

あるだろう。一九二八年一月号からの『労働運動』(Laborista Movado)に毎号エスペラント講座をのせ(これは少々乱暴なやり方で、はじめ二、三号だけ初等文法をのせ、あとは「参考書で研究せよ」とつっぱなしで、八月号あたりではクロボトキンの『賃金論』に注をつけただけになっている)、毎号、一、二ページのエスペラント文のレジュメをつけていたのを見たことがある。かれの著書には『平民の鐘』のほかに『日・エス・英・支会話と辞書』(一九二五年、大道社)があり、山鹿のエス訳から、E・ビバンコスの手でスペイン語に訳され、一九六三年にメキシコで『アナキズム歴史双書』の一冊として発行された『老子⁽³²⁾』がある。解説を書いているのは、十数年前来日したガルシアという当時の青年である。

山鹿は「オレの兄貴はバカだからな、天皇とメシを食ったのを喜んでるよ」と笑っていたが、芸術院会員かなにかの染織の大家山鹿清華が、泰治の実兄である。

山鹿死後のアナキスト間のエスペラント運動は、残念ながら微々たるものである。アナキズム復興の時代とも言われる今日、大杉や山鹿の志をつごととするアナキスト青年の少ないことは遺憾のきわみである。

注

- 1 『大杉栄全集』一九二〇～二六年 同上刊行会(以下『旧版全集』と呼ぶ)。復刻版は一九六七年 世界文庫。
 - 2 『大杉栄全集』一九六三～六五年 現代思潮社。
 - 3 La Japana Esperantisto 一九〇六年八月号。宮本正男「大杉栄は日本エスペラント協会の創立者とはいえない」リベラルテール 一九七三年五月・六月号 リベラルテール社。
- 日本エスペラント協会は一九〇六年六月十二日に創立総会を開き、大杉が保釈出獄したのは六月二十一日のことで、協会の第二回会合であった七月十二日にはじめて運動に加わっている。大杉が協会評議員に選出されたのは同年九月二十八

日の協会第一回大会のときであった。

- 4 『旧版全集』第三巻。
- 5 武藤丸楠編『伊井迂氏談論集 日本エスペラント学事始』一九三三年 鉄塔書院。この本には「物理学校で」と書いてあるが誤りである。
- 6 小坂猶二の談話。
- 7 坂井松太郎・加藤孝一・福田正男共編『エスペラント便覧』。
- 8 高杉一郎「日中エスペラント交流史の試み」『文学』一九六六年二月号 岩波書店。景梅九著、大高巖・波多野太郎訳『留日回顧』一九六六年 平凡社。
- 9 R・A・スカラビノ、G・T・ニュー共著、丸山松幸訳『中国のアナキズム運動』一九七〇年 紀伊国屋書店。
- 10 貫名美隆「ザメンホッフ手紙集の誤り」『神戸外大論叢』一九五八年五月号、および La Movado 一九六一年四月号 関西エスペラント連盟。
- 11 武藤丸楠編 前掲書。
- 12 同右。
- 13 高橋貞樹以下のことについては「木村京太郎さんをたずねる」La Movado 一九七一年四月号。
- 14 市川正一「日本共産党小史」『現代史資料』第一七巻 一九六六年 みすず書房。他に諸種の刊行本あり。市川の陳述の他の部分に異論をとらえた荒畑寒村も、この部分については沈黙しているし、山川均も異議をさしはさんでいないので、事実と認定したい。
- 15 藤間常太郎「福田国太郎先生を悼む」La Revuo Orienta 一九四〇年五月号 日本エスペラント学会。
- 16 日刊『平民新聞』一九〇五年一月二十一日号。『日本プロレタリア文学大系』序巻 一九五五年 三一書房。
- 17 『続』特別要視察人状勢一班 内務省警保局? 復刻版 発行年代不明 近代日本史資料研究会。
- 18 佐々木孝丸「ロメント若干」Nova Rondo 第一五号 一九七〇年二月 ロンド社。
- 19 解放運動犠牲者合葬追悼会中央実行委員会編『解放のいしずえ』新版 一九七三年 同上委員会。
- 20 山鹿泰治についての詳細な記録は、逸見吉三名儀による向井孝「山鹿泰治の一生」『現代の眼』一九七二年二月・四月号その他。山鹿自身が書いた未刊の自伝「たそがれ日記」およびこれのエスペラント版と言え、Unu anarkisto-Esperantisto (沼津市の「山鹿文庫」所蔵)にくわしい。向井のものは『山鹿泰治・人とその生涯』一九七四年 青蛾房。

第三章 北一輝と出口王仁三郎



京都亀岡の大本教本部にある「一つの神，一つの世界，一つの国際語」を刻んだ碑

- 21 中村日出男「わが父中村有楽」La Movado 一九七〇年六月号、および中村の談話。
- 22 黒板のこうした態度については、風間丈吉『モスコウとつながる日本共産党の歴史』一九五一年 天満社。羽仁五郎『私の大学』一九六六年 講談社。北山茂夫「日本近代史学の発展」岩波講座『日本歴史』第二卷 一九六八年（第二版）岩波書店版所収。その他。
- 23 信濃太郎『お茶の間の社会運動史』一九六九年 刀江書院。
- 24 スカラビーノ 前掲書。狭間直樹「劉師復と『民声』」『思想』一九七三年九月号 岩波書店。
- 25 L. Kókény, V. Bleier: Enciklopedio de Esperanto, 1938~1994, Literatura Mondo, Budapest. 『エスペラント百科事典』。
- 26 山鹿泰治「北京にいたエロシエン」La Movado 一九五三年十月号およびその再録 一九七一年十二月号。
- 27 高杉一郎『盲目の詩人エロシエンコ』一九五六年 新潮社。再録は同編『エロシエンコ全集』第三卷 一九五九年 みすず書房。山鹿自身の前記の文章では、この点があいまいになっている。
- 28 近藤憲二『一無政府主義者の回想』一九六五年 平凡社。同『私の見た日本アナキズム運動史』一九六九年 麦社。
- 29 近藤憲二『私の見た日本アナキズム運動史』。
- 30 『遺稿西村蔡喜自伝』一九七二年 遺族私家版。西村蔡喜「汎太平洋労働組合第一回会議の回顧」『労働運動史研究』第五五~五六号 一九七三年九月 労働旬報社。江森盛弥「詩人の愛と死について」一九五九年 新読書社。『現代史資料』第一九卷 一九六七年 みすず書房。このうちの杉浦啓一と国領五一郎の陳述に左翼の方針がくわしく出ている。
- 31 山鹿泰治「国立労働大学とエスペラント」La Movado 一九七一年四月号。『リベルテール』のこの年一月号あたりに同文。
- 32 Taiji Yamaga: Lao Tse y su libro del camino y de la virtud, traducido del Esperanto por Eduardo Vivancos, 1963, Littera y Liberland, Mexico.